

〔関田次筆〕夜間曆を見ることを、あるひはいむ人あり、中古、物いまひ多かりし代にも、この説はなかりしが、榮花物語に、東三條兼家公、一條天皇の東宮にたゝせ給ふにつきて、圓融帝の内勅にて、祈などせさせ給ふ所に、女御殿にも、のさゝめき申させ給ひて、おほんとなぶらめしよせて、こよみ御覽じて、所々におほんいのりの使どもたちさわぐとあり、

〔附〕漏刻砂漏 時計 併入 香刻 晷刻

漏刻ハ支那傳來ノ器ニシテ、水ヲ器ニ貯ヘ、箭ヲ樹テ、刻記シ、其漏洩ノ水量ヲ驗測シ、以テ時刻ノ推移ヲ知ルナリ、支那ニ在リテハ、其來レルコト既ニ久シク、我國ニ在リテモ、天智天皇ノ皇太子タリシ時、親ラ之ヲ製シ、踐祚ノ後ニハ、之ヲ朝廷ニ備ヘテ、百官ヲシテ時刻ヲ知ラシメ給ヘリ、爾來陰陽寮ニハ漏刻博士、守辰丁等アリテ、專ラ此ニ從事シ、行幸ノ時ト雖モ、亦必ズ之ヲ從フルヲ例ト爲シタリ、サレド此器ハ之ヲ用キルコトモ易カラズ、許多ノ費用ヲ要スルコトナレバ、諸國ノ國衙ニ在リテモ、之ヲ備ヘタルモノハ甚ダ尠ク、朝廷ニテモ中世廢絶セシコトアリ、

當時時刻ノ計算ハ、亦之ヲ支那ノ法ニ採リテ、一日ヲ十二時ニ分チ、又其一時ヲ數刻ニ分チ、一刻ヲ分チテ十分トス、而シテ十二時ハ之ヲ十二支ニ配シテ、日中ヲ午ト爲シ、夜半ヲ子ト爲シ、子ヲ一日ノ首ト爲ス、而シテ鼓ヲ擊チテ時ヲ報ジ、子午ニハ九下シ、丑未ニハ八下シ、申寅ニハ七下シ、酉卯ニハ六下シ、戌辰ニハ五下シ、亥巳ニハ四下セシヲ以テ、後ニハ直ニ子午ヲ九ツト云ヒ、丑未ヲ八ツ等ト云ヘリ、當時又子一ツ、丑二ツナド云フアリ、又子一點、丑二點點或ハ天ニ作ル、同音書畫ノ字ヲ用キルナリト云フト云フ、即チ子ノ一刻、丑ノ二刻ニシテ、一時ヲ分チテ四刻ト爲シ、晝夜ヲ通ジテ四十八刻ト爲シタルナリ、而シテ刻ト云フハ漏箭ノ刻ヨリ起リ、點ト云フハ鐘ノ點數ヨリ起ル、又卯酉ヲ晝夜ノ界ト爲シ、之ヲ六分シタレバ、晝夜ノ長短ニ從ヒテ、時ニ